第3回プロジェクト研究会①
米国における学校支援の現状と課題

話題提供者　センター客員教授（ジョージア大学教授）　リチャード・ヘイズ

2000.9.30

ここ10年のあいだに，全米各地の学校に関わり，その改革に携わってきたのですが，これまでの学校の体制というのは，何か学校に関する決定をするというのが，政府とかあるいは教育をつかさどる地方の機関であるとか，学校内で管理的立場にある人が決定権を持っているようでした。けれども，その学校内にいる人たちが自分たち自身がやっていることの決定に携わることの方が物事がうまくいくのではないかということで，私は今現在，研究をすすめています。

学校における人々のかかわり合いを見た場合，その中における役割ですが，生徒だけではなく，教える側，例えば教員あるいは学校の管理に携わる者も，皆が学ぶ側や教える側に立つことによって，その円滑な運用がはかられるのではないかと考えられます。学校に参加している人が様々な立場に立ってみることによって，学校におけるいろんな事柄が解決できたり，お互い理解が深められるのではないかと考えています。

また，大学の研究者が学校で行われることを考えるその理論と，学校の教師達の実践を別々のところで行っていると，うまくいかない事柄がしばしば出てきます。大学の研究者達と現場の教員達が一つの事柄に携わることによって，互いの理解を深めていけることがあります。そこで，今やろうとしている事柄の中心をなす概念というのが「エンパワーメント」という言葉にあたるものなのですが，それは，直訳すれば「力をつけること」ということです。言葉通り言えば，人に何か力を与えるということですが，例えば学校内で何らかの仕事を行う場合に，その仕事をしようとしている人たちに力を与えていくことであると考えます。

物理学で使われているパワー，力という言葉は，自らがその力を産みだすということではなくて，何か物事を行う，その許容力を蓄えるということになります。この場合のパワー，力の意味するところは，何か仕事ですとか，事柄を行うその許容力のようなものを指します。しかし，本報告で扱うパワー，あるいはエンパワーメントというのは，もっと狭い意味があります。どういうことかというと，力というのはただ孤立して働かせようとしてもそれは意味をなさず，その力が移り行く，移動していくことによって初めて力に働きが出るということです。一つの事柄，何かに対して例えば誰かが一生懸命やるというだけでは力の働きということにはならなくて，その働き掛けた力が次に何か誰かに働き掛けて，それが何かを産みだすというような事柄におけるその働き，あるいは力を意味しています。つまりエンパワーメントという言葉の意味は，ある人が有効な仕事をしていく力，許容力を増やしていくということなのです。

その力を受ける対象となる人をどのように捉えるかということですが，その情況にいる人たちが，自分が携わっている，自分がその何か決定に関して影響を受ける，その人自身が意志決定に携わっていくということが非常に重要であると考えられます。それから決定がなされる以前に，そのエンパワーメントを受ける者が，自分が影響を受ける決定について知らされているということも重要です。自分がなぜその決定を受けているか知っているということがまず先決で，それからその決定に関わる側の者，決定の影響を受ける者が，自分たちの方法でその決定をなしていくこと，そして最後に自分たちに関わる決定を行ったその責任を自分たちが負っていくというような事柄が，その力を受けていく者に関して必要な事柄です。

これからの学校に必要な事柄の第一は，管理者のような立場にある人も含め，意志決定によってその影響を受ける人たちが，その決定をどのように受けていくのか，その決定がなされる人たちと共にその決定について考えていかなければならないということです。例えば，何かを改善しようとしているグループがあった場合に，その人たち自身とその決定をするべきです。今まで決定に携わってきていた人たちがもっと目を向けて，あるいは一緒になってその何かをやろうとしている人たちの仕事を援助するような，そういう決定と働きかけが必要であろうと考えられます。

二つ目に必要な事柄というのは，学校において何かをしようという人たちが，一緒になって協力して物事を行っていかなければならないということで，それはどう

いうことかというと，別々に何かをしようというのではなくて，一つのことがらに，共に働くということと，学校がどうあるべきかというような事柄について，お互いに考え方を比べてその違いを認識したり，それによって互いの学校のあるべき姿のようなものについて持っている考え方の相互理解をはかる必要があるということです。

三つ目に重要な事柄は，一緒にやっていくことが本当に重要なこと，例えばカリキュラム全体を作るとか，新しいテキストを作り出すとか，学校全体を作る，新しいものにしていくというような，そういう大きな事柄の決定に互いに関わっていく必要があるということです。また，学校内にいる人が，その人自身の関心ということを考える必要もありますが，その個としての関心ばかりではなくて，その学校なら学校，集合体としてのなかで，いかに一人の市民，その全体に貢献する者として自分を捉えていくかということも重要です。

学校のなかでは何らかの決定が行われて，それに従って何かをなしていくわけですが，その結果が出るのは例えば1ヶ月後であるとかそういうことになってしまうので，自分がその行った決定を過去に遡って振り返ることが少ないと思われます。結果として出てきたことが，どこで，いつ決定されていたかを忘れてしまうことがあるので，自分がそれに責任を負った決定に関しては，何度も繰り返し認識しなおしていくことが重要となります。民主制の影響で，アメリカの学校というのは先生たちが別々の考えをもっていてもグループになって仕事をすることには慣れているわけですが，ただ，自分たちが別々の考えをもちながら一緒に働いた事柄が何らかの結果をもたらしたときに，決定する事柄は自分たちが決めたわけだから，自分たちがその責任なり結果の認識をしていくという，そういう体制を持っていく必要があると思います。

さらに，学校内でその問題を実際に見つけだすということも重要ですが，それだけではなく，問題の解決に携わって話しあいを行うということが必ずしも自分であるとは限らないということもあります。ある特定の問題について話しあいを持つということに適している人が学校内にいればその人を探しだしてその人に問題の解決にかかわる，ないしは話しあいをうまく運営してもらうということも考えられるし，あるいは学校外で示唆なりアドバイスをもらう人がいるのであるならば，そういった学校外の人と話をして，その人の助言を受けて，学校内の問題解決を円滑に行うということもあります。ある事柄，学校におけるその問題点を話しあうということに対して，適当な人を固定化しないで，学校内なり，学校外なりにその適当な人がいれば，その人を探しだし，その人に委ねるということ，それからその人やその話しあいから得たことをうまく引き受けて考えていくという必要があると思われます。

学校において，最後に付け加えておきたい重要な要素としては，学校内にいる人たちが，自分がめざすもの，目標をそれぞれすり合わせていくということ，それから，何か起こった事柄に対して，それを非難するばかりではなくて，それをただしていく，改善していく，そしてそうした改善に一緒になって参加していくという，それが必要だというふうに思われます。教師は，自分が一体何をしているのか，何をどう決めたか，それから，今何をしているか，これから何をしようとしているかを自身で考え直すことをあまりしません。それは，生徒たちが自分の行いについて振り返って，自分が今何をしていてこれから何が必要なのかということを考える必要があるのと同じなのですが，何をしているのかということを振り返ることによって，今やっていることを変えることができるという意味で，教師も変わる可能性ということを追求していく必要があろうと思われます。

今日お話してきたことのまとめになりますが，大学の研究者達と学校の現場の教員というのが協力しあって，その学校のあるべき姿であるとか，求める仕事のありようみたいなものを，その考え方についてすり合わせていくということ，それから，その学校に関わっている人たち，生徒も教師もそれを助ける大学の研究者達もそうですけども，そういった人たちが協力をして，改善の過程に参加していくという必要があるのではないかと私は考えます。